

る必要がある。

(2) 特殊学級障害種別児童生徒数

小学校特殊学級障害種別児童数の状況を昭和41年度から昭和51年度までのその推移からみると、精神薄弱は昭和48年度まで増加し、その後、やや鈍化して昭和51年度において3,126人となっている。

また、病弱・虚弱及びその他については、昭和46年度以降緩やかな増加傾向を示し、昭和51年度にそれぞれ501人、243人となっている（図2-5-3）。

中学校特殊学級障害種別生徒数の状況を昭和41年度から昭和51年度までのその推移からみると、精神薄弱は、昭和49年度まで増加の状況を示し、その後、ほぼ一定推移となり、昭和51年度において2,056人となっている。

また、病弱・虚弱については、ほぼ一定推移の状況にあつて、昭和51年度に42人となっている。

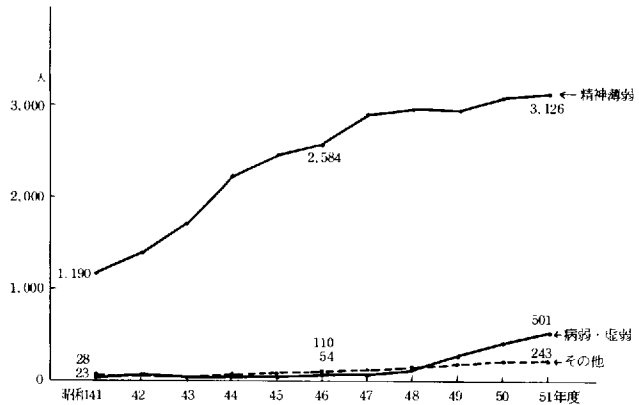
難聴は昭和49年度以降各年度2人の状況にある（図2-5-4）。従つて、今後は、障害の種別、程度に応じ、適正な就学を更に推進する必要がある。

(3) 盲、聾、養護学校障害種別児童生徒数

昭和42年度から昭和51年度までにおける盲、聾及び養護学校の幼稚部、小学部、中学部、高等部別及び障害種別就学児童生徒数の推移をみると、幼稚部は、聴覚障害のみで、昭和42年度から昭和45年度まで増加傾向にあつたが、それ以後、ほぼ横ばいの状況を示し昭和51年度に39人となっている（表2-5-1）。

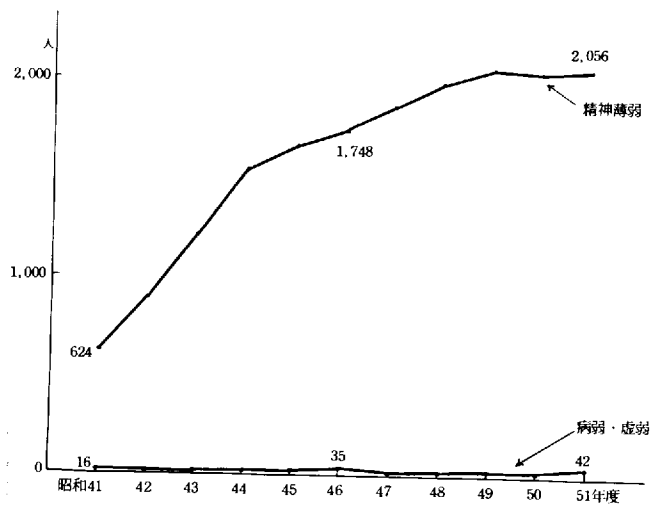
小学部については、合計で各年度500人前後となっているが、これを障害種別でみると、視覚障害及び聴覚障害の就学児童数は、著しい減少傾向を示しており、昭和51年度においてそれぞれ

図2-5-3 小学校特殊学級障害種別児童数の推移



注：1. 「学校基本調査報告書」(昭41～昭50)、「学校統計要覧」(昭41～昭51)による。
2. 児童数は、国立、公立の合計である。
3. その他は、難聴、言語障害、弱視、情緒障害である。

図2-5-4 中学校特殊学級障害種別生徒数の推移



注：1. 「学校基本調査報告書」(昭41～昭50)、「学校統計要覧」(昭41～昭51)による。
2. 生徒数は、国立、公立の合計である。
3. 難聴は、昭和48年度から昭和51年度まで、各年度2人ないし3人となっている。